

国文学研究資料館報

第16号

昭和56年 3 月

エール大学図書館蔵

奈良絵本 伊勢物語

脱葉・錯簡の復元を中心に

福田 秀一

一、はじめに

エール大学図書館東亜部長の金子

英生氏が同館東・亜コレクションの奈

良絵本伊勢物語を持参して当館に見

えたのは、去る昭和五十四年六月の

ことであった。まことにきれいな本

であり、何と言っても貴重な海外流

出資料なので、当館では二日間拝借

して調査させて頂く傍ら、撮影の許

可をも得て、当館マイクロ室に依頼

してマイクロフィルムに収めたのであ

ったが、惜しむらくは本文の続かぬ部

分が何箇所もあり、忽々の調査では脱

葉を疑って、その旨の紙片を該当箇所

に写し込んだのであった。けれどもそ

の後の調査によって、それらの不連

続は脱葉と同時に錯簡にもよること

できたので、この機会にそれを報告する次第である。

二、書誌の概要

初めに、書誌の概要を記す。

装訂・数量 列帖装（各帖二折から成る）三帖、桐箱入

寸法 二三・五×一七・五

表紙 紺地鳥の子に金切箔散らし、金泥で四季草木を描く（いわゆる嫁入本の外観）

外題 各帖表紙中央に一五・〇×四・一の朱題簽を貼り、「伊勢物語上（中・下）」と墨書

見返し 金紙に麻葉と龍の丸文様内題 なし

本文料紙 鳥の子（間似合紙）、金泥で草花を描いたものもある

紙数・行数等 上二六葉（うち遊

目次

エール大学図書館蔵奈良絵本伊勢物語	福田秀一	1
フランスにおける日本の展覧	ヘルナル・フランク	6
第四回国際日本文学研究会集	田嶋一夫	11
北京の秋		
文献資料部事業報告	福田秀一	13
研究情報部事業報告	古川清彦	14
管理・閲覧部事業報告	本田康雄	15
評議員会議・兼報		18
利用者へのお知らせ		19
昭和五十六年度春季学会開催一覽		20

紙首尾各一葉、中三六葉（うち

遊紙首一葉、下四〇葉（うち遊紙

有する）が、各帖に二面・二面・

一首二行（上下句各一行）。

なお、各帖二折から成り、各

折の料紙の枚数は次の通りであ

る。上第一折八枚、同第二折六

枚、中第一折九枚、同第二折一

〇枚、下第一折一〇枚、同第二

折一〇枚。但し列帖装の常とし

て、各帖第一折の最外側料紙の

右半分と最終折（今の場合には第

二折）の料紙の左半分とは、前

後の表紙と見返しとの間に入る

ため、前記の紙数は料紙枚数の

二倍から二を引いた数となつて

いる。

二面・一三面の奈良絵（寛文板

本と構図酷似、図1参照）を有す

るが、この他に絵を剥がされた

と思われる白紙（すべて下絵を

有する）が、各帖に二面・二面

・一面ある（図2参照）。

書写年代 江戸初中期（寛文頃）

箱書 箱蓋表面中央に「竹中少

弼殿御筆／いせ物語 三さつ6

P 右」と墨書（かなり剥落）

本文系統 天福本系統、一部武田

本系統本文混入

三、上帖の脱葉とその復元

さて、本文の不連続箇所であるが、

上に一箇所、中には二箇所、下には

十余箇所あつて、しかもその原因の

状況がそれぞれ少しずつ異つており、

その点でもいささか興味を引く。先

ず上帖の一箇所から述べる。

問題の箇所は、第二一葉裏（紙数

は首遊紙から数える、以下同じ）と

第二二葉表（以下、二二〇という風

に略記する）との続き（図2、当館撮

影フィルム第二六コマ）である。図3

右の面すなわち二二〇は第十四段の

後半から終まで、左の面（二二一）

は第十六段の途中から始まつており、

この間に元来第十五段の全部と第十

六段の前半のあったことが推測され

る。ところがこの見開きは、写真の



図2 023 上19ウ(12段後半)―20才(絵脱)



図1 021 上17ウ(9段末尾)―18才(絵)

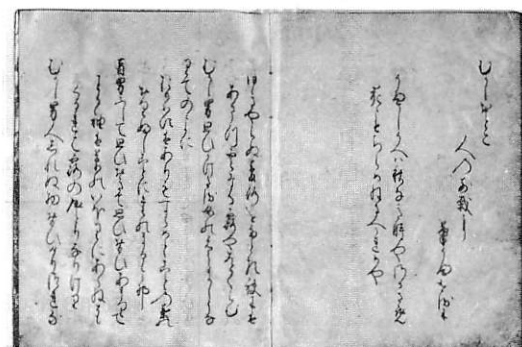


図4 063 中26ウ―27才(本文参照)

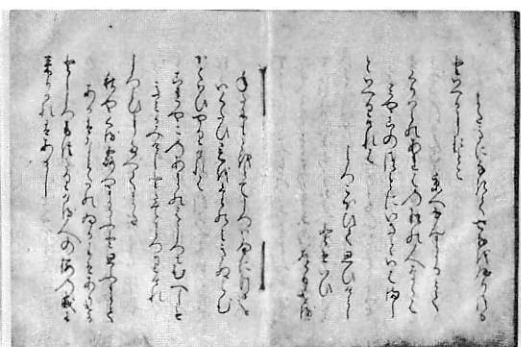


図3 026 上21ウ―22才(本文参照)



図6 066 中28ウ―29才(本文参照)

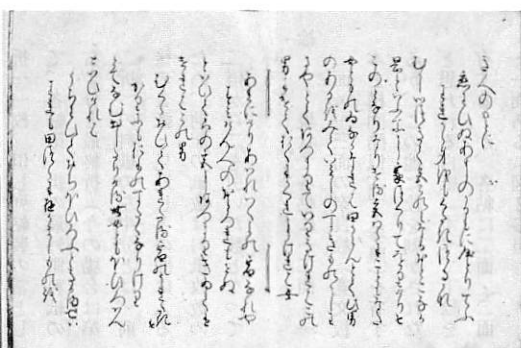


図5 064 中27ウ―28才(本文参照)

中央上下に二箇所綴じ糸が写っている。明らかなように、第二折の一番内側であるから、右の脱文は、そこにあった料紙一枚(二葉四面)が失われた故と、容易に考えることができる。失われた二葉を仮に二一A・二一Bと名づけて、その二葉四面に書かれていた内容を推測すれば、字数その他から推して、

二一A才Ⅱ第十四段の絵
二一AウⅡ第十五段
二一B才・ウⅡ第十六段前半

であろう。

四、中帖の脱葉とその復元

次に中帖では、(一)二六ウ―二七才(第六三コマ)と(二)二八ウ―二九才(第六六コマ)とに本文の不連続が見られる。すなわち、(一)二六ウには五十一段が記され(末尾の余白は他にも例があり、特に次面に絵の来る場合がそうで、不自然ではない)、二七才は第五十四段の歌から始まっている、この間に第五十二段・五十三段の各全文と第五十四段の歌に先立つ一行とが欠けており(図4参照)、一方(二)二八ウは第六十段の昌頭一行で終っていて二九才は第六十一段の冒頭から始まっているから、この間に第六十段の大半があった筈である(図6参照)。この(一)(二)で失われた本文を

見ると、共に丁度一面に収め得た分量と思われ、それを記していた二葉を前と同様に二六A・二八Aとすれば、

- 二六Aオ||第五十一段の絵
- 二六Aウ||第五十二段||第五十四段前半(歌の前書)
- 二八Aオ||第六十段中途||同段の終り
- 二八Aウ||同段の絵

となる。

ここで注意すべきは、右に欠脱を推定した二葉(二六A・二八A)の位置である。中帖の第二折は二七ウ||二八オの見開き(第六四コマ、図5参照)を一番内側にしているから、右の二葉は実はこの折の内側から二枚目にあつた一枚の料紙の右左各半分ということになる。すなわち中帖二箇所の不連続は、第二折内側から二枚目の料紙一枚を失つたためのものと分る。

五、下帖の本文不連続箇所

下帖の本文不連続箇所は十余箇所とかなり多く、その様相もやや複雑である。先ず明らかに不連続と見られる箇所とその前後の本文の状況を列挙すれば、次の如くである。

(一)六ウ||七オ(第八六コマ)

(一六ウ||第七十一段(以下「七一



図8 088 下8ウ-9オ(本文参照)

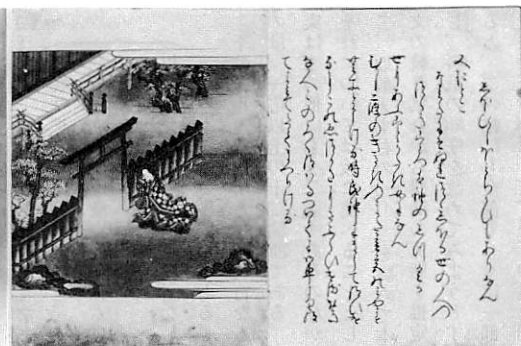


図7 087 下7ウ-8オ(本文参照)

- 段」という風に略記する)末尾七オ||七四段歌下句||七五段前半
- 前
- (一)八ウ||九オ(第八八コマ)
 - 八オ||絵(神社に参る女性)
 - 八ウ||七二段初||七四段歌上句
 - 九オ||七八段中途||へのみそにすへたりしを||終
 - 九ウ||絵(七八段のものと見られる)
 - (二)一〇ウ||一一オ(第九〇コマ)
 - 一〇オ||七九段初||八〇段中途
 - 一〇ウ||八〇段中途||終
 - 一一オ||八二段中途||て野より||で始まる)
 - (三)一二ウ||一二オ(第九一コマ)
 - 一二ウ||八二段中途(一一オに続き、「一年に」の歌まで)
 - 一二オ||八二段初||中途
 - (四)一二ウ||一三オ(第九二コマ)
 - 一二ウ||八二段中途(一二オに続き、「散ればこそ」の歌の少し後、「さけをもたせ」まで)
 - 一三オ||絵(七夕の供え物か)
 - 以下二二オまで不連続箇所なし
- この見開きは、この本の絵のあり方としておかしい。絵はその段の終った次の面(表でも裏でも)

- (五)二二ウ||二二オ(第一〇一コマ)
 - 二二ウ||八七段中途||終
 - 二二オ||絵(八七段のものと見られる)
 - 二二ウ||九二段二行||九三段終
 - 二二ウ||絵(九三段のものと見られる)
 - 以下二四ウまで不連続箇所なし
- (六)他にないものである。



図9 092 下12ウ-13オ(本文参照)

この見開きにも(四)と同様な不審がある。

(七)二四ウー二五オ(第一〇五コマ)

二四ウー九六段後半〜末尾近く
(「かのおとこはあまの」まで)

(八)二五ウー二六オ(第一〇六コマ)

二五ウー九〇段中途(二五オに
続く)〜九二段一行

(九)二八ウー二九オ(第一〇九コマ)

二八ウー一〇一段中途〜同段歌
上句

(十)二九ウー一〇二段初〜一〇三段

以下三二ウまで不連続箇所なし
中途

(十一)三二ウー三三オ(第一一三コマ)

三二ウー一〇七段中途〜一〇九
段一行

(十二)三三ウー一二二段歌〜一二四段

以下三五ウまで不連続箇所なし
中途

(十三)三五ウー三六オ(第一一六コマ)

三五ウー一二〇段初〜一二一段
中途

(十四)三六ウー三七オ(第一一七コマ)

三六ウー白紙
三六オは、前述の理由で絵があ
ったとは考えられない。

三六オは、前述の理由で絵があ
ったとは考えられない。

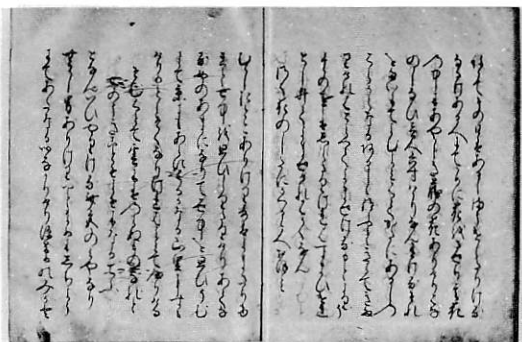


図10 109 下28ウー29オ(本文参照)

(十三)三五ウー一二〇段初〜一二一段
中途
三六オは、前述の理由で絵があ
ったとは考えられない。

(十四)三六ウー三七オ(第一一七コマ)
三六ウー白紙
三六オは、前述の理由で絵があ
ったとは考えられない。

以下三九ウまで不連続箇所なし
三六ウも三六オと同様である。

下帖の不連続箇所として明白なも
のは、一応以上の十二箇所である。
実はこの他にも二箇所あるのだが、
それについては後に述べることにし
て、取敢えず右の(一)〜(四)を眺めて本
文の続き具合から錯簡の原態を推定
し、料紙の順序を改めてみようとする
と、この帖にも全部もしくは一部
を失った段があつて、上・中帖と同

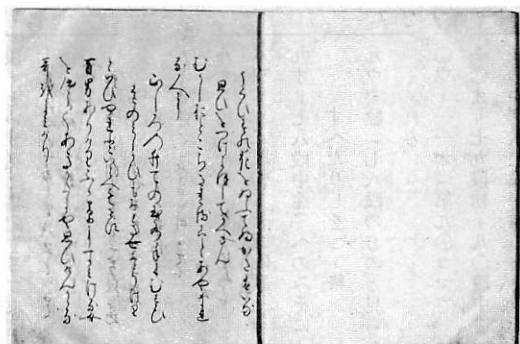


図12 117 下36ウー37オ(本文参照)

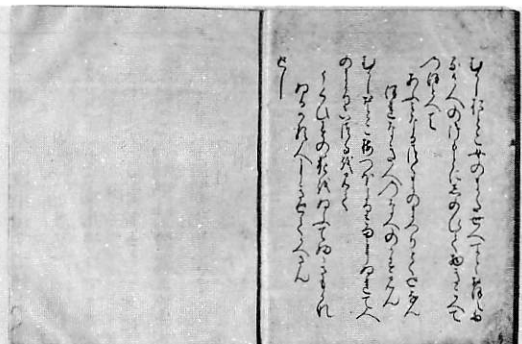


図11 116 下35ウー36オ(本文参照)

様に脱葉による欠脱のあることが分
る。それを各位置に推定して料紙の
復元順序を示そうというのであるが、
叙述の便宜上、大きく(一)〜(四)と
(五)の二グループに分けて述べる。前
者は第一折、後者は第二折に属し、
かつそれぞれの折の中での錯簡・脱
葉になっていると見られるからであ
る。

六、下帖第一折の錯簡・脱葉とその
復元

この折の料紙の順序を訂してみる
と、一応次のようになる。

①六ウー八ウー七オウー脱葉1
(七六段歌〜七八段中途)〜九オ
ウー一〇オウー脱葉2(八一一段)
〜一二オウー一三オウー一三オ
ここで気づくのは、初めの六ウー
八ウという連続が不自然だというこ
とである。八ウの直前には当然八オ
が来なければならない。そう思つて八
オを見直すと、前記(図7)のように女
性が神社に詣でる絵で、これは七ウの
七六段にも合致するが、六オウの
七一一段(斎宮の段)にも適合し、
かつ七ウは余白を残さず七六段の中
途で終っているのに対して、六ウは
七一一段末尾の歌を書いた後にかなり
の余白を残しており、次には絵が来
なければならないのである。すなわ

ち八オは七一段の絵に違いなく、従ってこのグループの冒頭部は

①六ウー八オウー七オウー（以下①に同じ）

とすべきであると同時に、④七ウー八オという十三番目の不連続箇所が見出されたことになる。

ところがそうすると、ここに一つの不審が生ずる。列帖本の性質上、ある折の丁度一番内側の一枚もしくは二枚以上を失ってその部分で不連続になっている場合（右の上帖が正にそれに当る）を除いては、不連続箇所の数は偶数でなければならぬのに、この下帖では、第一折の中央部（九ウー一〇オ、第八九コマ）も第二折のそれ（三〇ウー三一オ、第一一コマ）も右面から左面への連続に疑問はなく、ましてこの本には中央折り目の部分で切れて右又は左の半分のみを残している料紙もないからである。従って右十三箇所の他にも

う一箇所不連続部分のあることが予想されるが、その箇所が第二折にあることも、ほぼ確かである。第一折の不連続箇所は、右の発見によって偶数個となったからである。

以上のように料紙復元順序を推定して図式①（①による修正を加える）を見ると九ウー一〇オの見開きを中

心に、錯簡と脱葉がその前後で対称になっている。これはすなわちこの見開きが一番内側になっていることを示しているが、実際確かめてみると、九ウー一〇オの見開き（第八九コマ）にも綴糸が上下二箇所見えて、右の推定でよかったことが分る。次に脱葉1・2に書かれていた内容であるが、字数その他から推して、実はこの二箇所の脱葉は各一葉（料紙にして一枚）ではなく、各二葉（料紙二枚）であつたと考えられ、その内容は次のように推定される。

脱葉1 A オ 〇 七 六 段 歌 終
同 ウ 〇 七 七 段 初 中 途
脱葉1 B オ 〇 七 七 段 中 途 終
同 ウ 〇 七 八 段 初 中 途
（「みさうしのま」まで）
脱葉2 A オ 〇 八 〇 段 の 絵
同 ウ 〇 八 一 段 初 中 途
脱葉2 B オ 〇 八 一 段 中 途 終
同 ウ 〇 八 一 段 の 絵

七、下帖第二折の錯簡・脱葉とその復元

この折について第一折と同様に復元図式を示せば、次のようになる。但し……はその間の部分が元来も現状の通りであつたと見られる意である。

②二〇ウー二五オウー二一オ……

二四ウー二六オ……二八ウー脱葉3（一〇一段歌下句同段終）
一八九オ……三二ウー脱葉4（一〇九段二行一二二段歌の前）
三三オ……三五ウー三七オ……

三九ウー三六オウ（白紙）

ここでは、二九ウー三〇オの見開きが対称の中心になっていることと、二〇オウと対称になるのが四〇オウでなければならないことが読み取れ、事実二九ウー三〇オ（第一一コマ）にも綴糸が見えて、前者に關しては推定の當つていたことが確かめられる。

後者について現状をフィルムで確かめてみると、四〇オウは末尾遊紙であつて、三九ウ（白紙）一四〇オの箇所は白紙同志のため元来の連続と見てきたのであるが、以上の復元推定を見れば、ここにもう一葉白紙（三六オウ）が入るのであつた。すなわち②の末尾は

②（三九ウまでは②と同じ）三九ウー三六オウー四〇オウ

とするのが正しく、また現状で十四番目の不連続箇所として④三九ウー四〇オを挙げねばならないのであつた。これで第二折の不連続箇所も八个となり、さきの疑問は氷解する。

最後にこの折の錯簡・脱葉の原因

・状況については、前項までの所説から類推されて改めて説明の要はないと思うが、脱葉部分の内容は、

脱葉3 オ 〇 一 〇 一段歌下句同段終

同 ウ 〇 一 〇 一段の絵

脱葉4 オ 〇 一 〇 九 段 二 行 一 一 一段第一首の前

同 ウ 〇 一 一 一段第一首一 一二二段歌の前

であつたと推定される。

八、結語

以上、先年当館で短時間調査し、また撮影を許されたエール大学図書館東亜コレクションの奈良絵本伊勢物語について、その後考察し得た脱葉・錯簡の過程とその原態の推測とを述べた。が、書誌および伝本系統の調査は五十四年度に、錯簡・脱葉の復元は五十五年度に、それぞれ部の教官と共に行なつたものである。なお、利用条件の確認や閲覧用複写作成などの手続・処理の都合上、この本のマイクロフィルム的一般利用は、もう暫く猶予された。

（文献資料部長）

フランスにおける「日本学」の展望

ベルナル・フランク

本日、国文学研究資料館の全館
教員会議の席におきまして、皆様の
前で、お話できますこと、誠に光栄
と存じます。

此の館の外国人研究員として、今
まで招聘された日本研究者は、アメ
リカ人、二人、英国人、一人でした。
フランス人として私は初めてですが
、今日の機会を得て、フランスに
於ける、所謂「日本学」の発展の過
程について、最近考えたことを、少
し述べようかと思ひます。気楽な調
子でい、と言われましたので、気楽
に話をする積りで居りますが、気楽
でなかったら、只、下手だからと思
つて下さい。

日本の開国時代まで、フランスは、
日本と直接の接触が殆んどなかった
ことは、すでに御存じであると思ひ
ます。フランスが持つていた日本に
就いての知識も、殆んど全部、ポル
トガルやイスパニアの昔の宣教師、
或いは江戸時代に入国を許された少

数の外国人が背き残したものに基い
ていたものだったと言えるでしょう。
オランダ人に交り、日本まで来て、
日本語を覚えたフランス人が居たか
どうか分りませんが、そう言う人が
居たにしても、自分が習ったことを、
何も本国に伝えないまままで終つてし
まいました。

一八二〇年に、パリの「アジア学
会」が、その日本語に関する無学を
嘆いて、時の中国学者であつたラン
ドレース氏に、ロドリゲスの「日本
大文典」の概論を仏語に翻訳する様
に頼みました。

訳文の端書きに、次のようなこと
が書いてあります「日本という国の
言葉は、残念乍ら今の所は、此の国
に全然知られていない。中国学者は、
日本の書物を使うことがたまには有
るけれども、分る所は漢文で書かれ
た部分に限られて、日本語そのもの
の部分には、惜しいことに理解が全く
出来ない」。

ランドレースがした翻訳は、期待
に依て、学界に日本語の姿を忠実
に示したもので慥かに貴重な仕事で
あつたと認めなければなりません。

併し、その翻訳が伝えていた日本語
についての記述は二世紀ぐらい前の
ものそのまゝでしてその間につゆ程
も進歩を遂げなかった、と言つても
いいでしょう。数年も経たないうち
に発表された、シーボルトの日本語
についての新しい紹介と比較すると、
その時代のフランスの日本について
の学問の状態は、やはり、随分遅れ
ていたものと結論しなければなり
ません。

フランスで同時に活躍していた偉
大な東洋学者——例えば、法顕——
西域を廻つて歩いた法顕の「仏国記」
の訳注をした、アベル・レミューザ、
或いは、梵文法華経の翻訳と精密な
解釈に没頭した、ビュルヌーフ——
のことを考えれば、当時の日本学は、
誠に貧弱なものでした。

日本の書物として、その時に一番
よく知られていたものは、「和漢三
才図経」であつた様です。

一八三〇年代の後半に活躍しはじ
めた、レオン・ド・ローニという変つ
た青年が登場しますと、かなり大き

な変化が生じて来ます。

ローニは、有名な中国学者のスタ
ニスラス・ジュリアンの弟子であり
乍ら、独学で日本語を学んだ人です。
他の学者と違つて、日本語を、単なる
東洋学の一つの補佐的言語と見做
さず、日本の文明のあらゆる面に興
味を持ち、日本の文学・歴史・宗教
・教育史・地理・産業などの様々な
問題に手を延ばしています。

その上に又、世界史上の多くの分
野に関心をもち、古代ギリシャの詩
歌、或いは、コロンブスの発見以前
のアメリカの文明にさえ夢中でした。
その時代に生まれた「民俗学」とい
う新しい学問の先駆者の一人で、フ
ランスの民俗学会の初代の会長にも
なりました。

文久年間に、幕府の遣外使節が渡
仏して来ると、ローニは日本語の通
訳となり、使節に随行した福沢諭吉
に、絶え間なく質問をしつづけます。
使節の帰る時が来ると、名残りが惜
しくて、ロシアまで日本人達を追ひ
かけて行つた程です。

一八六三年（文久三年）に、パリ
の「東洋語学校」で、日本語の講義
が初めて開かれると、ローニが、
「日葡辞書」の仏訳をしたレオン・
パジェースを差しおいて撰ばれ、講

師——そして五年後の明治元年に、教授——に任命されました。

ローニは、慥かに、博識でしたが、方法論の上で弱点が多かったのも事実です。例えば、江戸末期に流行っていた所謂「神代文字」の説に熱心に従った彼は、その文字はどうも、現代印度でも、使われている DEVANAGARI 文字に似ていると思いつきました。そして、語源的に見ても「サンスクリットの DEVA は、天、則ち神の意味である」、相互関係があると確信して、「日本書紀」の「神代の巻」の本文を、例 DEVANAGARI 文字で書き替えるため、長時間を割きました。無駄か、遊びか見当がつかないことです。

併し、やはり日本に関する著作や論文を多量に発表したローニが、日本をフランスに広く知らせる、という大仕事を果たしたことは否定出来ません。数年に渡ってバリで、「世の噂」という日本語の雑誌を編集して出版したことを忘れてはいけません。それは海外で印刷された最初の日本語の雑誌だと言われております。

不思議なことに、日本にあれ程夢中だったローニは、その頃フランスに湧き出した「日本崇拜」とも言える「ジャポニズム」運動と余り関係

がなかった様です。

「ジャポニスト」達の立場は、勿論、学者のそれと大分違っておりまして。併し彼らの日本の美に対する理解の深さには驚くべきものがあります。例えば、近いうちに日本語訳が予定される「LE JAPON ARTISTIQUE」(芸術の国日本)と言う彼らの宣言であった雑誌にそれがよく表わられています。

けれども、「ジャポニスト」達がずっと鑑賞していた日本の芸術品は、御承知の通り、殆んど全部近世の産物に限られていました。一九〇〇年にバリで開かれた「万国博覧会」に、日本国が展示した、上代・中古・中世の彫刻・絵画その他の古美術品は、歐洲人に大きなショックを与えて、ヨーロッパが今まで持っていた、日本のビジョンをかなり動揺させました。

此の二十世紀初頭、日本を知らうとしているフランス人の間に、また別の方向から新風が吹いて来ました。

その頃、ハノイに創立された、Ecole Française d'Extreme-Orient フランス極東学院は、「一流の東洋学者を集め、十九世紀の後半にい

っそう盛んになった文献学・歴史・考古学・民俗学などのそれ／＼の分野で様々な調査を始めました。日本についての研究を専門にする人を、その仲間に入れる意向も出て来ました。

高等師範を卒業してから、奨学金を得て日本に暫く滞在した結果、日本の上代文化に於ける諸問題に関心を持つ様になったクロード・メートルと言う人が丁度その頃に居りました。ラテン・ギリシア古典のしつかりした教育を身につけたメートルにとっては、基本的な資料に基いて勉強することが当然でした。批判的精神もかなり鋭かった人でした。

彼がフランス極東学院の「紀要」に載せた「日本の歴史文学」についての論文(その中で、「日本書紀」・「古事記」・「語部部の文学」・「旧事記」・「古語拾遺」などの問題に触れた論文ですが)——それを前の世代のローニが書いたものと比べると、あらゆる点で相違が目立ちます。

暫く経ってから、メートルは、もう一人の日本研究者を学院に呼ぶことにしました。

今回加わった人は、日本でそれま

で長い間、宣教師として活躍していたノエル・ペリでした。ペリは、日本の社会における道徳・理想及び諸芸術に現れた美的表現に興味を持ち、仏教・神道を勉強し乍ら、日本の音楽と文学とに広く通じている人でした。彼の傑作である「能」という研究及び比類のない翻訳集は、今でも我々にとって常に参考となる模範的な書物です。

メートルとペリが、フランスにおける真の学問としての「日本学」の創立者であったことは疑いありません。併し、二人とも、専ら研究者としての生活を送った、めに、本国の教育機関で、弟子を育てることが出来ませんでした。その上に又、二人とも割合に早く亡くなってしまいました。

一九〇五年あたりまで、ローニはまだ東洋語学校で教授をして居りました。その後日本で以前に領事をしていたドートルメートルと言う人が、講座の担当者になりました。

ドートルメートルは、日本語及び当時の日本の政治制度の実際の知識をかなり持っていたらしいのですが、決して学者ではありませんでした。

そういう訳で、東洋語学校のその時代の雰囲気には、いかにも「人材」を待望する状況がありました。

やっと出て来て呉れた人は、私の先生に当たるシャルル・アグノエール¹¹⁾でした。

アグノエールは、一八九六年に生まれて、一九七六年に、満八十歳でなくなりました。

若い時から、言語の研究に興味が高く、第一次大戦が起こる前にすでに日本語を勉強し始めていました。

戦時中はずっと兵隊の背囊に、ドイツのヘルマン・ブラウト著の日本語文法書を背負って歩き廻りました。

平和が戻った後、その頃のどうしようもない日本語の専門家から離れて、学問と方法論を別の所に捜しに行きました。

当時の学界において、研究者達の関心を特に引いていた一つの大問題

は、古代アジアに於ける東西交渉のことです。中国と中央アジア・印度

・その他の国々との間の交流のテーマに就いて、論文が盛んに出ます。

日本を専門にしたアグノエールも、同じ様に日本列島と大陸との関係における様々な問題に引かれて、考古学・民俗学・言語学・文献学のあら

ゆる方面から、それらの問題に取り組もうとしています。

サンスクリットの大家のシルバン・レイイー¹²⁾、敦煌の発見者の一人として知られているボル・ペリオ¹³⁾、中国古代史の有名な専門家であるアンリ・マスベロ¹⁴⁾、中国の思想を社会学

の境地から考え始めたマルセル・グラネの諸先生の弟子となり、その上に又、メイエのもとに言語学を習い、マルセル・モースのもとに社会学を

修めた彼は、誠に、当時一番進んでいた学問を兼備していたと言えます。

働き盛りの時に完成された、彼の『日本文明の起源』と言う大作には、彼が若い時に一生懸命身につけた、あの学問教育が、至る所に見られます。

アグノエールは、大正の終り、昭和の初め頃に、八年間日本に滞在してから帰国し東洋語学校で、ドートルメールの後任教授に任命されました。そして、暫く経ってから、彼は十九世紀の後半にパリ大学から独立して創立された「国立高等研究院」

(Ecole pratique des Hautes Etudes)の宗教部で、東洋——主に日本と朝鮮——についてのゼミを担当することになりました。

このゼミの講座はロシア革命の後に、フランスに亡命してそして、特に、フランスの日本美術研究に非常に影響を与えたセルジュ・エリセーエフ¹⁵⁾の為に設けられたものでした。

併し二年も経つと、エリセーエフはハーバード大学に呼ばれて、アメリカへ渡ってしまいました。そこで、アグノエールは此の「国立高等研究院」で、東洋についての自分の長い経験、並びに厳密な方法論を伝えて、十数人の弟子を育てることになりました。今はもう中年に成った我々は、殆んど皆、彼にその時その場で教育を受けたものです。

一九五〇年頃、パリ大学の文学部は、当時文学博士となっていたアグノエールの為に、日本文化の講座を設立しました。それによって、非常勤の教員にたよっていた大学の中の日本科がしっかりとて来しました。

アグノエールは此の様に大学に講座が出来てから、東洋語学校にあった籍を弟子に譲り、「国立高等研究院」のポストを兼任しつづけました。

その当時の日本語の学業の大体の状況は、次の様なものでした。日本語を習いたい人達は、大学から独立して、国立の専門学校だった「東洋語学校」で三年間勉強して居りました。

更に知識を深めようと思っていた学生は、その後大学の日本科で二年勉強して「国立高等研究院」のゼミにも通って居りました。

アグノエールが定年退職となった年は、かの有名な大学紛争が起こった一九六八年に当たります。

二年後、パリ大学が解散され、「五学部」の制度もなくなり、「教育・研究単位」という新しい細胞集団として作られた、十三の「パリ新大学」が生まれました。

日本学の上でも、四十年近くにわたって、我々の研究を決定的な水準にまで高めた老先生が舞台を下りたことは、誠に一つの変わり目をもたらす様に見えました。

当時の産業の問題にも興味を見せた十九世紀のローニと違って、メートルも、ペリも、アグノエールも日本文明の起源・日本の宗教・思想・文学・芸術についての歴史的な研究に熱中して、近代・現代の日本に背を向けた人達だったと思われるのではないのでしょうか。決してそんなことは有りません。宣教師だった時のペリは、当時の日本の社会に関する問題を取り上げた雑誌を、長い間編

集しました。メートルも——彼としては晩年にもなった大正の終り頃、パリにすでに来ていたエリセーエフと共に「日本と東洋」という雑誌を暫く出しました。この雑誌の中には、永井荷風、谷崎潤一郎を初めとして、エリセーエフと親しかった作家達の短篇の翻訳がかなり多く掲載されています。アグノエールも協力して、鴨外の「高瀬船」の翻訳を雑誌に発表しました。彼は、日本に居た時分に、アプアス通信社の駐在員を何年もつづけて居りましたので、日本の現状及び日本のジャーナリズムの世界に、相当詳しく通じて居りました。

併し、フランスの研究者や教師達の頭の中に、昔から残っていた或る考え方によれば、現代の物事は、特に文学作品は、自分で読むもの、味わうもの、考えるもので、大学でそんなに勉強しなくても分る筈だとされていきました。

その上また、逆に経済学・政治学・地理学・現代史・現代思想その他の分野で日本に関心を示していた人々は殆んど皆、急を要した、めに、日本語を習うことに熱心ではありませんでした。

後者から見ると、前者は古臭いこ

と許りやりまして、今の日本の生きている姿を仲々紹介して呉れないということになりました。前者にしても、後者は只、なまけ者で、実は何も知らない問題について、いかにも何でも知っている様な顔をしている、という皮肉が出て来ます。

この様な犬と狼の合戦は、完全に終わったとは言えませんが、状況が十数年の間に大分よく成つて来たことは事実です。そういう変化の原因は勿論色々ありますが、一番大きなことは、現状を知りたいと思い、現代を理解する為には、日本の場合も、言葉の勉強が避けられないと分るようになった人達が非常に増えたことです。

結果として、現代日本を専門にしようと思つている学生数は、日本語の教育機関で圧倒的に多くなつて、彼らは興味を持つているそれぞれの分野で研究を発売に行なう様になりました。

数年前に、「国立高等研究院」から独立した。同研究院の社会科学部では、日本の経済と日本の地理の研究の両分野で講座が創設されました。

大学においては——そのことは前に少し触れましたが——パリの「新

大学」が十三生まれまして、それらのうちの二つに、日本語科が作られました。

その一つは、旧東洋語学校を前身として出来たもので、今一つは、旧パリ大学の文学部にあった日本語科から生じたものです。前者は、現代の諸言語・文学・比較文学を軸にしている所謂「第三大学」に付属し、後者は、理科・言語学・社会学・歴史その他の専門を、新しい方式で教えることを意図した「第七大学」の中で発達して来ました。学生の数から言えば、前者が後者よりずっと多いのですが、進んだ研究者の数から見れば、後者は絶対に負けません。

今のフランスでは、「日本学」という言葉は実は、余り好まれなくなつて来て、人々はむしろ「日本についての諸研究」という表現を使います。

「アグノエール時代」と比較すると、研究者の態度にも大きな変化が出て来て、日本を一つの世界として中心におかずに、今の研究者達は自分が、先づ歴史家・文学研究者、言語学者などであり、その立場に立つて、日本に関する問題を、それらの分野で研究している、とよく述べ

ます。

恩師と比べれば、皆のビジョンが儘かに狭い様に見えますが、多くの分野で我々の日本についての知識をしっかりと進めさせて呉れる的確な研究が此の頃は出て来ています。

貴之の真似をして申しませうか「古へを仰ぎて、今を戀ひざらめか」。

(昭和五十五年十二月十四日まで
国文学研究資料館客員教授)

(注)

- 1) ランドレース (Landresse)
- 2) ロドリゲス (Rodrigues)
- 3) アベル・レミューザ (Abel Rémusat)
- 4) ビュルヌーフ (Burnouf)
- 5) レオン・ド・ローニ (Leon de Rosny)
- 6) アタニスラス・ジュリアン (Stanislas Julien)
- 7) レオン・パジェス (Léon Pagés)
- 8) クロード・メートル (Clande Maître)
- 9) ノエル・ペリ (Noël Péri)
- 10) ドートルメール (Dautremier)
- 11) シャルル・アグノエール (Charles Haguenauer)
- 12) シルバン・レヴィエ (Sylvain Lévi)
- 13) ポル・ペリオ (Paul Pelliot)
- 14) アンリ・マスペロ (Henri Maspero)
- 15) マルセル・グラネ (Marc'l Granet)
- 16) メイエ (Meillet)
- 17) マルセル・モース (Marcel Mauss)
- 18) セルジュ・エリセーエフ (Serge Elisséeff)
- 19) アプアス (Havas)

第四回 国際日本文学研究集会について

第四回 国際日本文学研究集会が、昭和五十五年十一月十三、十四日の両日、当館大会議室にて開催された。

この会は広く内外研究者に参集を求め、研究発表と討論によって日本文学研究の進展をはかるために毎年当館が主催しているものである。今回の集会は海外から三十余名の参加者を得て、総参加者数は百十六名にのぼった。今回の企画は、研究発表(八名)と講演(一名)で前回催されたシンポジウムは見送られた。

研究発表は十三日午後から始まり、長谷川泉座長のもと、まずシドニー大学の松井朔子氏が「三島由紀夫の近代能楽『熊野』について」を発表し、三島の「近代能楽集」の中であり注目されていない「熊野」をとりあげ、この作品を詩劇あるいは詩劇と観念劇両要素を持つ作品であると分析し、再評価を試みた。次にエール大学大学院生のジョン・ツワリト氏が「井伏鱒二の文学の日記」を発表、「さざなみ軍記」「黒い雨」を中心に論じ、「黒い雨」では主人

公重松をして、彼は日常的儀式としての日記を書くことによつて被爆という非日常的体験の傷を癒していることとして指摘、そこから井伏文学に顕著にみられる日記体文章の内実を解明しようとした。

第二セッションでは福田秀一座長のもと、まずアルガリア・ソフィア大学のツベタナ・クリステワ氏が「『蛸蛤日記』と『とはずがたり』との考察」を発表した。氏はここで、日記文学の特質を右両作品に即して指摘し、時代的背景、作者の内面問題、日記自体のもつ文芸時間の問題等について分析を行った。コーネル大学大学院生のルイス・クック氏は「宇治の垣間見について」を発表し、「橘姫」巻での垣間見の場面をとりあげ、「対比」と「組合せ」「叙述」「語り」の四視点から解明してみせた。

続いて池田重座長のもと、跡見学園女子大学の葉寄民氏が「日中両国における近代詩革命」を発表し、「新体詩抄」と胡適の「白話詩八種」を

中心に比較検討した。慶尚大学校の李相漢氏は「和歌と時調の植物素材に関する考察」を発表して、主に万葉と時調の植物を対比してそこから両国民の嗜好を抽出し、美的感覚の違いを浮びあがらせた。

第二日は午前中、白田甚五郎座長の司会により淡江大学の翁蘇倩卿氏が「梁塵秘抄と変文の関係についての一考察」を発表した。氏は唐代に流行したいわゆる口承文芸と「梁塵秘抄」や声明文学との影響関係を論じた。また、明治大学の林雅彦氏は「熊野比丘尼の絵解き」を発表し、熊野比丘尼たちの勸進活動とその経過を論じ、地獄絵についてはスライドを使用して解説を行った。

午後からは当時当館客員教授で、コレージュ・ド・フランス教授のベルナル・フランク氏が「平安朝の『風流』の先駆者としてみた源融」という題で講演した。氏は源融の人となりと経歴とを詳述し、また河原院構築にあられた融の美的感性を風流の先駆として評価した。

以上、研究発表は多くの応募の中から偶然にも中古文2、口承文芸2、近代文学2、比較文学2、というふうにバラエティ豊かに選ばれたが、これらはジャンルや方法論

にとられず、様々の角度から日本文学を検討していることとしている本集会のありうべき姿の一つを示している。この集会で目についたことは、今まで外国人の若い研究者の発表に對しては、幾分儀礼的評言を使っていた日本人研究者の態度が変わり、外国人研究者に對してもかなりシビアな質問が飛んでいることである。またそれに対して外国人研究者が独自の方法論を聴者にわかるようねばり強く説いていたことも印象に残っている。これら発表者とフロアーとの質疑は回を重ねることより濃密になってきていると思う。次回が期待される。(情報室)

国際日本文学研究集会会議録(第四回)

PROCEEDINGS OF THE 4th INTERNATIONAL CONFERENCE
ON JAPANESE LITERATURE IN JAPAN
(1980)

研究発表、講演、記録編(内容は上記参照)

(会議録については、当館情報室に御連絡下さい)

北京の秋——中国出張報告——

田嶋 一夫

中国科学院計算センタの招待を受け、また国際交流基金より出張命令を受け、十月十四日より二十五日まで北京に出張した。目的は漢字データ処理の指導ということであった。

漢字処理のテーマではじめての正式招待（同センタの王中田副処長のことば）ということで、厚い歓迎を受け、滞在中七回の講演と四回の座談会を行い、さらに科学院の計算機室、同図書館、北京大学、北京図書館を訪問した。そこで出張報告をかねて、北京の印象を記す。

私の行った講演は、漢字コード、コード化法、交換用漢字コードの意味、外字処理、漢字辞書の設計と運用、漢字入力法、漢字情報処理のアプリケーション等の内容であった。

聴衆は約四〇名ほどであったが、白髪（はつぱ）の初老（しよらう）と思える人から、若い人まで、年令も多様であり、専攻も漢字改革の研究者から、コンピュータ部門の第一線の研究者までと、きわめて多様性にとんでいた。主に北京近郊の人と思われたが、中には遠くハ

ルビンから参加している者もあった。一貫していたものは終始熱心に耳を傾けてくれたことであった。座談会には李一华女士（北京大学）、陳耀星氏（華北計算機技術研究所）、姚維范氏、王建新氏（科学院計算技術研究所）等十数名のメンバーであった。ここでは日本のJIS漢字コードに対する質問が多かったが、これは現在、中国にも漢字コード研究会があり、その主要メンバーが参加していたこと、コードの具体的提案がまとめられていたことも深くかわつていたと思われる。入力に関しては、ラインアット方式に関する質問が多かったと思われるが、これは中国での研究にも文字分解によるものがあることと関係していたと思われる。コーディングにどれだけ、パンチにどれだけ時間がかるか、とか、戦後の漢字政策はどうなっているか等の質問には、しばしば答える元気を失ったものである。

当初用意していた講演内容は、コードの問題と外字処理、漢字辞書

までであったが、七回も同じところで、同じ人を相手に話すということを三回目に知らされ、入力法とアプリケーションに関するところは、急提宿舍で用意したものであった。暗い電燈の下で、しかも何の資料もないところで必死になって準備したものである。中国ではファイル処理はほとんど普及していないのが現状であるが、言語解析や編集ソフトの問題については、数名の者から真剣な質問を受けたので、効果は十分あったものと思う。

科学院の図書館や北京図書館では、見学のあと必ず座談会が用意されていたが、漢字処理に関する関心が深く、質問がなかなか尽きなかった。北京図書館では計算機籌備組のメンバーと会見したが、機械化の資料を収集していること、LC・MARCの利用方法の研究をはじめたいとの意向をもらっていた。

滞在中、漢字がどう配列されているのか等漢字使用の実態に注意を払っていたが、予想以上に多様性がある。図書カードにしても、その書名カードが、音のアルファベット順、部首順、画数順の配列等さまざまである。

辞書の配列やインデックスにしても、四角号码、筆画査字法等さまざま

までであった。ことに予想外であったのは、北京ですら拼音（ピンイン）に対して拒絶的な反応を示す人が多かったことである。これは中国において漢字コードがどのように配置されるのか、また漢字データがどのように配列されたら良いのか、きわめてむづかしい問題であることを示している。しかし講演の中でも何度かふれたのであるが、漢字辞書（フォントと属性の辞書）のデータベースをもち、それをうまく活用することを考えれば、多くの問題が解決すると私は思う。

例えば多様な拼音（北京用拼音、広東用拼音等）を、辞書中にもつことにより、それぞれの地域用の拼音出力が可能であろうし、またさまざまな配列用キーを辞書中にもてば、漢字ソフトも多様な要求に対応できるであろう。

北京の最も美しい時は十月であると言う。スケジュールの間をぬつて案内してもらった香山、天壇、故宮博物館、万里の長城、明の十三陵、それぞれ本当に印象深いものであった。万里の長城が山の尾根に、あたかも大古の恐龍の背の如く見えはじめたとき、その果しなき意志を感じ、十三陵タムの白い記念碑に、毛沢東、周恩来、朱徳と並んで刻された劉少



奇の署名には日本では実感することのできない中国の大きさを感じた。

北京の大通りを走る自転車、馬車、トラクター、オート三輪、トラック、乗用車、そしてあふれるばかりの人の群、あらゆる面で整備途上にあることも確かであろう。とても実りの秋とはいえない。しかし不要物をふりおとしやがて芽吹いてくる近代化の為に準備をはじめた秋であることも事実であろう。

最後に、お世話になった中国の方々、出発に際し便宜を図ってください。国際交流基金、またさまざまな形でお手伝いくださった館内の方々に厚く御礼申し上げます。

(情報処理室)

文献資料部事業報告

福田秀一

前号の故大久保部長の報告に続いて、昭和五十五年七月一日以降本年一月末日までに行なった当部の主な事業について報告する。なお、当部はそれぞれ主として古代・中世・近世における国文学に関する文献その他の資料の調査研究及び収集を所掌事項とする第一・三室と国文学の特定領域に関する文献その他の資料の調査研究及び収集を所掌とする第四室(客員部門)とから成っているが、種々の必要便宜から、第一・三室は、内部に個々の分担はありながらも、きわめて密接な連絡のもとに一体となつて行動している。この報告も従来通り右三室を併せた形で記すが、第四室に関しては、右三室と緊密に連絡をとりながらも分担がややはっきりしている。本報告の中に一項を立てて述べる。

九州地区文献資料調査委員会議

十月二十四日、熊本市熊本厚生年金会館会議室において開催、当部から福田が出席した。

先ず当部から九州地区における当年度の調査収集計画の実行状況について集計したところを報告した上、当年度の今後の実行計画につき、既調査で未報告分の報告の提出等、具体的な要望を行なった。次に、当地区の次年度(昭和五十六年度)以降の調査収集計画につき協議し、かなり具体的な見通しを得た。最後に、当館のあり方や調査員会議の運営その他につき、いくつかの有意義な提案があり、活発な意見交換を行なった。

中部地区文献資料調査委員会議

十一月十九日、名古屋千種区の王山会館にて開催、当部から村上が出席した。

九州地区と同様に、先ず中部地区当年度の調査収集計画の実行状況について当部から報告した上、当年度の今後の実行計画につき九州地区と同様な要望を伝えた。

ついで、各調査員からその経験を踏まえて、調査収集の方針やその実行方法、また事務手続等に関し、種々具体的に有益な意見や要望が出された。

れた。更に当館の運営全般に對しても、將來へ向けていくつか有意義な要望が出された。

北海道・東北地区文献資料調査委員会議

十二月十九日、盛岡市こずかた会館で開催、当部から伊井が出席、オブザーバーとして原田貞義氏(岩手大学助教授、文献資料調査員経験者)の参加を得た。

上記二地区と同じく、先ず当年度当地区の調査収集計画の実行状況につき当部から報告し、それについて各調査員の感想意見が表明されたが、それらの意見は、調査計画の立案や予算執行等の問題に関し、今後の指針として甚だ有益であつた。

ついで当年度の今後の実行計画につき具体的に協議し、次年度以降盛岡公民館その他の調査収集計画についても具体的に検討して、一応の成果を得た。その他有益な情報や意見の交換を行なった。

第四室

昭和五十五年度は、前号所掲の通り松崎仁(立教大学教授)、真鍋昌弘(奈良教育大学助教授)の両氏を迎え、主として近世劇文学と中世歌謡の分野で当部の活動に對して助力を乞うたが、その成果としては、特に次の

二つがある。

一つは、主として右両分野に関し、現在までの当部の調査収集方針やその成果を検討した上で、今後の調査収集計画の立案・推進に関して種々建設的・具体的な示唆を与えられたことである。第二は、特定の文庫・コレクションにアプローチして、その専攻領域をもって当部の事業の重要な一面である調査研究の具体作業を行ない、その成果を寄せられたことで、これは当然学界への貢献として何らかの形で一般へも還元される筈であると同時に、当部の今後の活動の資料としても甚だ有益であつた。なお後者の成果の一端は、第一・三室が当年度に調査研究及び収集に際して得た成果の一端と共に、『調査研究報告』第二号に発表の予定である。

昭和五十五年度文献資料調査収集の概況

一、調査

本年度当部は、全国各地の文献資料調査員・同特別調査員ならびに公私の所蔵者各位の協力を得て、現在までに左の四十五箇所計七、三三七点の文献資料を調査した。所蔵者ごとの調査点数は、紙幅の都合で今回も省略するが、『調査研究報告』第二

号には掲出する予定である。

北海道・東北地区

旭川市立図書館・市立函館図書館
・八戸市立図書館・弘前市立図書館
・秋田県立図書館・塩釜神社・会津若松市立会津図書館

関東地区

彰考館・千葉県立佐倉高校（鹿山文庫）・麗沢大学図書館・永青文庫・宮内庁書陵部・同学院高等学校（藤田・小林文庫）・東京芸術大学附属図書館・東京都立中央図書館（加賀文庫）・東洋文庫・久松国男（当館寄託本）

中部地区

新潟大学附属図書館（佐野文庫）・富山県立図書館（志田文庫）・（石川県）・金沢市立図書館（稼堂文庫他）・個人寺社五件・武生市立図書館（福井県）・山梨県立図書館（徴典館文庫）・徳川美術館・名古屋市立鶴舞中央図書館・蓬左文庫（尼崎コレクション）・牧野文庫（愛知県）・射和文庫・神宮文庫

近畿地区

京都女子大学附属図書館・京都市文学部（類原文庫）・陽明文庫・大和文庫（奈良県）

中国・四国地区

三原市立図書館・毛利報公会博物館・山口大学附属図書館（若月文庫）・大喜多勤学・多和文庫河野信一記念文化館・高知県立図書館（山内文庫）

九州地区

九州大学附属図書館（支子文庫）・熊本大学附属図書館（北岡文庫）・臼杵市立臼杵図書館（大分県）・個人一件（宮崎県）

海外

ケンブリッジ大学図書館
この中、海外のケンブリッジ大学図書館は、同館未整理和古書の整理に助力を乞う旨同館から当館への依頼に基き、五十五年七月八月に当館から当部福田が出張した折、国文学関係で稀見と思われるものを中心に僅かの点数について簡単な書誌調査票のコピーを入手したものである。因みに右の未整理和古書と言うのは、アストン・コレクション（G・E・アストン蔵本）をその大部分とする和古書約一、九〇〇点の一部（約七〇〇点）で、同館前館長故キーデル氏がすでに整理した分（約一、二〇〇点）と併せて、近く目録刊行の見込と聞く。

二、収集
本年度に当部は、全国各地の公私

所蔵者や調査員・特別調査員等の協力を得て、現在までに左の二七箇所計四、六四四点の文献資料を収集（マイクロフィルム撮影）した（既製マイクロフィルム購入一件を含む）。これも紙幅の都合で一に準ずる。

北海道・東北地区

市立函館図書館・青森県立図書館
・八戸市立図書館

関東地区

四孝文庫・船橋市立図書館・宮内庁書陵部・東京芸術大学附属図書館・東京都立中央図書館（加賀文庫）・東洋文庫

中部地区

富山県立図書館（志田文庫）・個人寺社四件（石川県）・静岡県立中央図書館・愛知教育大学附属図書館・名古屋市立鶴舞中央図書館・西尾市立図書館（岩瀬文庫）

近畿地区

陽明文庫・大阪市立大学附属図書館（森文庫）・中村幸彦

中国・四国地区

島根大学附属図書館・大喜多勤学・弥谷寺・河野信一記念文化館・高知県立図書館

九州地区

宮崎県総合博物館・都城市立図書館・個人三件（宮崎県）

(既製マイクロフィッシュ購入)
東京大学附属図書館(知十文庫)

(文献資料部長)

研究情報部事業報告

古川 清彦

国文学に関する研究情報の増大に
対してその収集・整理・提供につき
当部の三室ともに全力を挙げている。
国際日本文学研究集会も漸く定着し
回を重ねる毎に注目をひくようにな
った。コンピュータの一部機器の増
設の問題をかかえ、情報処理室と他
室の連絡も活気を帯びている。

以下各室毎に状況を報告する。

(一)情報室。昭和五十五年十一月十三、
十四日の両日、別稿のように第四回
国際日本文学研究集会を開催し、そ
の会議録を発行した。

新聞情報については収集・整理を
続け、昭和五十四年度版『国文学年
鑑』用に「新聞所載論文目録」を作
成した。新聞情報を整理した計報・
受賞・国際関係記事については索引
が完備した。

また国文学関係者ファイルについ
ては、情報量を増して整備し、また
更新にこれ努めている。

(二)編集室。『国文学年鑑』について
は、本年度は昭和五十四年分の編集

を行った。情報室の協力により新た

に「新聞所載論文目録」の項目を立
て、主要新聞十五紙に掲載された著
名目録を収めた。年々論文も増えて
おり、今年分は前年より約六十頁の
増頁となった。三月二十五日刊、五
〇〇〇円、至文堂。

「国文学研究資料館紀要」は四篇
の論文と四篇の資料を収めた第七号
を三月末日刊、一〇〇〇円、至文堂。
「昭和三十七年以前研究論文目録」
は本年度は三十七年度以前論文目録
のカード採りを開始した。

(三)情報処理室。

すでに業務化している当館蔵「マ
イクロ資料目録」、「逐次刊行物目
録」の作成および日常の資料管理シ
ステムの運用のほか、今年度の開発
プロジェクトについては、

- (1)当館蔵古書目録作成システム(マ
イクロ資料目録作成システムの拡
張)の設計。
- (2)逐次刊行物目録作成システムのピッ
チ処理機能追加の完了。

(3)昭和三十七年以前論文目録の出力
部の開発。

(4)データ・ベース・マネージメント・
システム(DBMS)の開発。

(5)著者典拠ファイルデータ蓄積部の
開発。

(6)漢字管理システムの整備運用。

(7)日立のシステム開発研究所で開発

した日本語情報検索システムの、
当館のデーターへの適用実験。

をそれぞれ行った。

語彙検索システムの研究開発も進
めている。また、現在のレンタル料
の範囲内で、一部機器の増設をはか
り、

(1)中央処理装置の主メモリーを七六
八キロ・バイトから、四メガ・バ
イトへ拡張。

(2)ディスク駆動装置を二台に増強し、
八〇〇メガ・バイトから一六〇〇
メガ・バイトへ拡大。

(3)プログラム用端末を現在 三台(一
台は資料管理システムのオンラ
イン運用に使用)を五台に増設。

(4)オペレーティング・システム(OS)
のVOS2からVOS3への
レベルアップ。
をそれぞれ行つて、昭和五十六年度
から運用する予定である。

(研究情報部長)

国文学研究資料館紀要第七号

謡曲「昭君」考 小林健二
飯田武郷とその周辺 古川清彦
大政翼賛会と文壇 奥出 健
人家和歌集(翻刻・索引・錯
簡考) 福田秀一
法華直談私類聚抄 渡辺守邦
飛鳥井雅章自筆「吉野雲」 島原泰雄
福聚談(翻刻) 岡 雅彦
索引の機能と情報検索 石塚英弘

一部市販予定

国文学年鑑(昭和54年分)

昭和五十六年三月二十五日発行

(内容)

・学界展望
・雑誌紀要論文目録(新聞所載
論文を含む)
・単行本解説
・学界消息(学会一覧・学会研
究発表一覧・新指定文化財目録
・科学研究費等交付一覧・受賞
一覧・計報)
・索引
至文堂より市販

整理・閲覧部事業報告

本田康雄

古典籍総合目録作成事業は基本計画の策定を終了して、所蔵者に関するデータの第一次入力、書誌データ六千件の試作を行った。「マイクログ資料目録」の作成は軌道にのり、四冊目（一九八〇年）の作業を終え年度内刊行の予定である。また国文学研究のための基本図書および原本の充実、逐次刊行物バックナンバーの整備を行った。共同利用機関として全国にわたるサービスを効果的に行うため当館の相互利用サービスの細部を明示した「共同利用のてびき」を作り図書館、文庫その他の関係者各位に配る準備をしている。公開講演会は、同時に開催した国文学文献資料の展示とタイアップして、毎回満員の盛況であり、特に夏期講演会（三日間連続）は好評で、国文学関係の多数の学会の研究成果をこの様な形で普及し得る点に国文学界のユニークさを確認し、今後の発展を期している。以下、当部における昭和五十五年七月より一月までの各室の事業状況を報告す

る。

(一) 整理・閲覧室

利用者の定着に伴いサービス業務が増加しているが、目録作成等の定常的業務はほぼ順調に進捗している。コンピュータによるマイクログ資料目録作成についていくつかの懸案事項を解決し、さらに原本を取扱えるよう広汎なシステムとすべくバージョン・アップの方向で、情報処理室と共同してシステム分析およびデザインを始めた。

本年度より着手した古典籍総合目録作成事業は、委員会並びに専門委員会において計画案の審議や諸々の問題の検討を行った。同時にデータの作成作業にも入った。

(1) 受入業務 この期間における資料受入数はマイクログ資料（オリジナルフィルム）の数）一、〇〇四リール（フィルム）、二五八枚（フィッシュ）、図書一五〇〇冊、逐次刊行物四一九一巻冊（新タイトル二七〇点）であった。また昭和三七以前文献目録

新収資料紹介 16

朝風集 歌集一冊

「近代名家著述目録」「柳営年中行事大成」他多くの編著を残し、伴信友の「本居宣長年譜」の草稿作成者であったとも伝えられる、江戸の国学者堤朝風の歌集である。

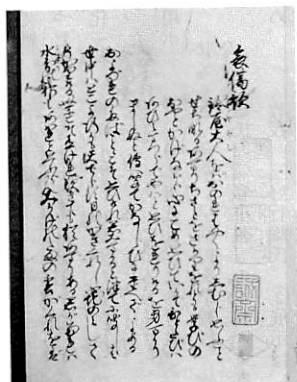
美濃判、二十四丁、十行書きの写本で、本書が朝風の自筆本であることは内閣文庫蔵の「朝風意林」残存六〇冊中の数点の朝風自署名本の筆跡に徴して明らかである。また、表紙右肩には有名な「第一と第二のゆひもてひらくへし其よみたるさかひにをりめつけ又瓜しるしする事なかれ」の印刷された小紙片が貼られ、巻頭には「朝風」の菱形朱印も捺されている。

所載の歌は巻頭に「哀傷歌」と題するとおり、妻・子・孫などを失った折りの哀傷歌がほとんどであり、病人の傍にあつて看病しながら平愈を願う歌、神詣りの歌、そし

て死、野辺の送り、後日在りし日の事共を思つての歌など二八九首を取める。なお、巻頭に鈴屋大人の死を傷める歌一三首を載せて巻頭を飾っているところに、朝風の宣長に対する畏敬の念が感ぜられる。

本書が日頃書き留めた歌稿からの抜き書きであることは「そのほどくさくさ思ひつづける歎きのおほよそ」「年明て後よめる歌の中に」と後日纏めの時点で書いた詞書きが二ヶ所存在することと知れる。哀傷の歌以外の巻も存在したのであるが、その所在は知られていない。

（岡 雅彦）



作成事業のための逐次刊行物バックナンバー複写収集は二二九八巻号冊であった。なお古活字本（組合せ絵）『曾我物語』（横山重氏旧蔵）も受入れた。

(2) 古典籍総合目録作成 所蔵者に関するデータの第一次作成を行い大略三千件を超すデータの入力を終えた。基本となる書誌データについては試行を重ね、データ・フォーマットに改善を加えながら、六千余件のデータを作成した。その他データベース・データや翻刻・複製本データ等はまだ検討していない。（なお、データの種類については、『館報』前号を参照されたい。）

総合目録作成に合せて行う著者名典拠ファイル（著作に係る人名の形別称等や読みの統一を行う）の作成については、情報処理室と共同してシステム・デザインの後データ蓄積のソフトウェア開発に入った。

(3) 整理業務 『マイクロ資料目録一九八〇年』は、版下作成を行い、索引の作成及び最終的な校正を残すだけとなり、年度内に刊行する。この採録書目数は八、四二九点である。次年度目録用のマイクロ資料の整理のほか、図書等の整理については、定期的に進行している。

また共同研究の成果として、『初雁文庫主要書目解題』が刊行されるが、それと合冊した体裁で『初雁文庫目録』を刊行すべく、原稿の作成を終った。

(4) 閲覧等サービス業務 利用者数の伸びが大きかった。特に八・九月はカウンターは三人がかりで複写、出納作業で忙殺された。昨年度に比して二割の伸び率であった。このような状況に対処すべくカウンター業務の効率化や閲覧室全体の長期的なフロア・プランなどの検討を徐々に進めている。相互協力による複写等サービスも増加しているが、共同利用機関として全国にわたるサービスを行うためになお一層当館の相互協力サービスの促進を図りたい。その趣旨で相互協力のための広報資料「共同利用のてびき」を企画し、その作成にとりかかっている。従来の「利用案内」とともに、当館に相応しい資料利用の手びきとなろう。

(5) マイクロ室業務 今期においては収集ネガ・フィルムから作成する作業用ネガ六五二リールを作成し、五四年度収集分についてはおおよそ終了した。閲覧用ポジフィルムは、五二年度収集分は完了し五三年度収集分の加工に入っている。併せて七一四リール作成した。紙焼写真について

では、『マイクロ資料目録一九八〇年』に収録された八文庫について紙焼写真を作成し、製本準備を行った。所蔵資料の撮影はマイクロ資料化一点、文献複写サービス五点を行った。なお、その他文献複写サービス用ポジフィルム四六点を作成した。

(二) 参考室

レファレンス体制の充実に努め、参考図書、参考質問の調査・回答等に当たった。また参考用資料として日本文学史・年表類の書誌、『参考書誌叢刊三』の作成刊行を準備中である。

国文学の普及業務として、①講演会は、九月四日（水）六日（金）、各日一時三十分より、第三回夏期公開講演会「和歌の流れ」を開催した。演題及び講師は左記の通りである。

四日 「万葉の集団性と古今の集団性」 成城大学助教授 鈴木日出男氏、「東歌の二、三の問題について」 日本大学教授 森淳司氏。

五日 「『折り』の文学としての平安和歌」 都留文科大学教授 久保木哲夫氏、「新古今以後の和歌と歌人」 東京大学助教授 久保田淳氏。

六日 「和歌革新運動の問題二、三」 歌人 佐佐木幸綱氏。

（右、夏期講演会は『国文学研究資

料館講演集第二集』として年度内に刊行予定。）次に、第十三回公開講演会を十一月十五日（土）一時三十分より開催した。演題及び講師は次の通りである。

「日本近代文学における『あそび』と『余裕』」早稲田大学教授 竹盛天雄氏、「『私小説』の本質」 東京大学教授 三好行雄氏。②展示は、次の特別展示を前記講演会と併催した。「歌書展」（九月四・十日）、「館蔵貴重書展」（十一月十一・十五日、その目録を『国文学研究資料館特別展示目録五』として本年度内に刊行予定）、また常設展示は、「中世文学その一」（七月十日・八月二十七日）、「江戸から明治へ―戯作と近代文学」（十月十一・十五日）、「中世文学その二」（十一月二十五日）。

（整理閲覧部長）

国文学研究資料館講演集2

「和歌の流れ」

（昭和五十六年 参考室編）

昭和五十五年の第三回夏期公開講演会の筆録集（内容は上記参考室業務報告参照）

御希望の方は参考室カウンターにて配付いたします。

共同研究

昭和五十五年度の共同研究は、前号に報告した共同研究員九名と館の教官七名（大久保正二年度内死去・福田秀一・松田修・渡邊守邦・島原泰雄・岡雅彦・阿部好臣、官制順）とが、前年度以来の初雁・久松班と俳書班（いずれも仮称）の二班に分れ、それぞれ前年度を受けて、次のような活動を行なった。

（初雁・久松班）五十二・五十三の両年度に、分担執筆し五十四年度に編集・推敲した初雁文庫の主要伝本原則として新写本を除く写本と古活字本計一六九点の解題原稿を一層修正・整備して印刷原稿を完成した。また、久松国男氏寄託本一〇二点の中から古代・中世の歌学・歌論書の伝本若干を選んでとりあえず初雁文庫本と同様な要領で解題原稿を作成し、解題の方法につき検討を深めた。（俳書班）前年度末、俳書の解題研究の実践例として酒田市立光丘図書館の俳書を取り上げ、計画一七三点のうち八九点については、すでに分担者による解題原稿が完成して、目下全員で検討中である。一方、残り八四点についても年度内に分担者ご

とに原稿を完成する予定である。

共同研究報告1の刊行

右に述べた五十二年度以降の初雁文庫に関する共同研究の成果を、『国文学研究資料館共同研究報告1 初雁文庫主要書目解題付、初雁文庫目録』と題して、年度内に刊行し、関係機関に配布すると共に、一部市販（明治書院より）をもさせることになった。なお、この報告には、読者・利用者の便宜を考えて、右の書名に示されているように当館所蔵初雁文庫全七百余点の分類目録を付したが、これは整理閲覧室の編集になるものである。

（福田秀一）

国文学研究資料館報告第7号

「著者名典拠ファイルのデータ構造」

- 1 著者名典拠ファイルの作成プロジェクト（試行）の課題
 - 2 古典籍における著者名の構造
 - 3 統一著者名の決定
 - 4 第一次データの概要
 - 5 むすびにかえて
- （著者名典拠ファイル・データ作成要領（案））

新収資料紹介 ⑰

私惑袖中策 古活字版上下二冊

紗綾形空押し紺色紙表紙（二六・〇×一九・〇㎝）、外題なし。かなり早い時期に改装、裏打ちを施す（補修の際天地を相当裁ち切っている）といえども書品古雅。本文四周単辺（二三・四×一五・四㎝）無界、一面一〇行二〇字。版心幅広く白口花魚尾に「私惑上（下）（丁付）」、紙数上一八丁、下二五丁、各冊巻頭一丁は目録。下巻最終丁に「於江戸梓刊」の刊記あり。

近世初頭の江戸における古活字出版事業は数少ない例より知られておらず——そのほとんどは天台宗関係のものであつて、版式等叡山版に同じい——印行の書籍自体遺存稀で、元和六・七年頃の刊行と推される私惑袖中策も、当館新収のものその他には、大東急記念文庫、日光山海蔵の各一部を数えるのみである。

が転載されていて、永禄二年定珍書写本——私惑袖中策の最古の伝本であり、叡山文庫現蔵——の天正五年豪春写本に依拠したものであると知られる。

さらに数ヶ所にわたる誤植訂正が見られ——上巻目録「第八下能脱上」の「能」字は、「聴」と誤植してその箇所を白く塗抹し、上から正しい字を印しているし、また下巻には同様に白塗抹を施しながらも活字でなく筆で訂正した例がある——書誌学的に興味深い資料でもある。

如上、現存三部の稀観、対校された本文の筋のよさ、書誌資料としてのおもしろさ等々の美質を有する掲出本に「宝玲文庫」（フランク・ホーレー）の蔵印あるは、錦上さらに花を添えるもの。

本書は伝教大師最澄の撰とされ、諸々の疑惑迷妄を払って天台一乗の教えを究明宣揚する。弘仁九年以降の成立か。

（渡邊守邦）

掲出本には全巻にわたって多量の朱墨書き入れ・校合が見られ、上巻末には比校点本の奥書

研究員等の受入れ

外国人研究員

氏名 ベルナル・フランク
職 コレージュ・ド・フランス 教授
期 昭和五十五年八月十五日
昭和五十六年三月十一日

研究内容 平安時代文人の研究
(源順・源為憲等)

国際交流基金フェロー

氏名 ウラジスラフ・ゴレグ
職 ソ連科学アカデミー東洋研究所レニングラー

期 昭和五十六年一月七日
昭和五十六年七月六日

研究内容 日本文学史(八世紀から十三世紀の日本文学資料の研究)

公立大学研修員

氏名 両角倉一
職 山梨県立女子短期大学国文科助教授
期 昭和五十五年十月一日
昭和五十六年三月十一日

研究題目 連歌師の創作と古典学

の研究

— 宗祇を中心として —

大学院受託学生

氏名 武井和人
所 東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻
期 昭和五十五年四月一日
昭和五十六年三月十一日

研究題目 中世文学の研究

海外出張等

海外出張

氏名

氏名 福田秀一
渡航先国 連合王国
期 昭和五十五年七月十四日
昭和五十六年八月二十日

渡航目的 ケンブリッジ大学図書館所蔵アストン・コレクションの整理・調査研究

渡航先国 中華人民共和国
期 昭和五十五年十月十四日
昭和五十六年三月十一日

渡航目的 中国科学院計算センターにおいて、コンピュータによる漢字データ処理の指導

海外研修

氏名 大野瑞男

渡航先国 ルーマニア社会主義共和国・ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国・ギリシャ王国・ブルガリア人民共和国・トルコ

期 昭和五十五年八月八日
昭和五十六年八月二十五日

渡航目的 第十五回国際歴史学会議参加及び東欧歴史学研究状況調査

氏名 安澤秀一

渡航先国 連合王国
期 昭和五十五年九月八日
昭和五十六年九月二十九日

渡航目的 国際文書館会議及び文書の保存科学ケンブリッジ国際会議並びに史料保存状況調査

氏名 石塚英弘

渡航先国 オーストラリア
期 昭和五十五年十月十一日
昭和五十六年三月十一日

渡航目的 第八回世界コンピュータ会議出席

評議員会議の開催

本年度第二回評議員会議が、去る三月六日(金)当館中会議室において、石井議長ほか十七名の評議員の出席を得て開催され、昭和五十六年度予算について、昭和五十五年度事業中間(報告及び昭和五十六年度事業概要等)について評議が行なわれた。

人事異動

昭和五十六年二月一日付

免文献資料部長事務取扱

(併任)

文献資料部長

福田秀一

国文学研究資料館報告第8号

データ処理システムにおける漢字字種

1序論

2国文研データ処理システムの特徴

3調査対象データと調査方法

4出現字種とその分析

5今後の課題

付載資料

使用字種一覧

JIS内の非出現漢字一覧

利用者へのお知らせ

◆ 資料利用のための手引、冊子体
目録類案内

所蔵資料を有効に利用していただくために、当館では「マイクロ資料目録」を始め、数種の刊行物類を出しています。これらは、利用者と資料との媒介となるもので、利用方法や手続等一般的な利用案内用と、所蔵資料の検索ツール用とに分れます。前者では「国文学研究資料館資料利用案内」があり、毎年その年の変更事項を盛り込み、改訂を加えています。また、直接来館して利用することが困難な人のために、所属機関を通じて利用していただく際の手続その他を詳しく説明した「共同利用のてびき」が近日中に刊行されます。「利用案内」は、関連機関に配布する他、来館利用者にはもれなくお渡ししていますし、「共同利用のてびき」も大学図書館を中心に関連機関に配布する予定です。

ここでは、後者の検索ツール用であるマイクロ資料及び逐次刊行物の目録について、最新版を中心に簡単に御紹介します。

(1) 「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録」

年刊のペースで現在三冊刊行さ

れています。各冊とも九、〇〇〇点前後のマイクロ資料が収載されています。既刊のものについては、別にその縮刷版が笠間書院から市販されています。

今年度刊行予定の一九八〇年版には、初めて在外資料、英国図書館蔵の室町期奈良絵本五点を含め、二三所蔵者(文庫)分、総点数八、四二九点です。

*一九八〇年版マイクロ資料目録収載所蔵者(文庫)一覧

55	51	46	35	34	33	32	30	25	20	19	18	12	6	支所No	所蔵者(文庫)
陽明文庫	大阪市立大学附属図書館(森文庫)	東京大学文学部国文学研究室(本居文庫)	初雁文庫	神宮文庫	東洋文庫	水府明徳会彰考館	刈谷市立図書館	東京都立中央図書館	宮内庁書陵部	国立公文書館内閣文庫	国立国会図書館	岡山大学附属図書館(池田家文庫)	東京教育大学附属図書館		

62	64	65	66	70	213	ト1	マ2	ヤ3
神宮徴古館農業館	徳島県立図書館(木下眉城文庫)	徳島県立図書館(阿波国文庫)	大阪府立中之島図書館	桑名市立文化美術館(秋山文庫)	The British Library	山本嘉将(稲葉文庫)	益田勝実	出岸徳平

(2) 「国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録」

* 英国図書館

毎年増補改訂されており、現在は第三版の一九八〇年版です。

今年度刊行予定の一九八一年版は、収載タイトル数、二、二五三誌で八〇年版に比べ三〇〇誌近く増えており、既存誌の追加分も含め、全体で約五、〇〇〇冊に相当する巻号の所蔵データが新たに加わります。一方でバックナンバーの収集等にも力を注いでいますので、従来の欠号分もかなり補充されています。

(3) 所蔵目録であるこの二者の他に、国文学関係の研究文献一般を対象とした目録である「国文学年鑑」、

これまでに発行された国文学関係の索引を対象にした「索引書類リスト」、特別展示に陳列した資料の略解題付き書誌「特別展示目録」があります。「索引書類リスト」、「特別展示目録」の書目には請求番号も付されていますので、検索ツールとしても利用できます。

◆ 大阪市立大学附属図書館蔵森文庫のマイクロ資料のサービス区分が「B」に決まりました。これまでは「X」(Eに準じ、館内閲覧のみ)でしたが、今後は紙焼複製サービス、紙焼写真本の一夜貸しができるようになりました。一九七八、一九七九、一九八〇年版の「マイクロ資料目録」に収載されていますので、御利用下さい。

◆ 当館では、受入れた古写本、古刊本等の中から特に資料的価値が認められるものを選び、貴重書に指定しています。今度新たに次の八点が指定されました。

- 1 「狭衣」下巻(写) 2 「義経記」土佐少揀正本(刊) 3 「連歌新式追加并今案等」(写) 4 「羅生門物語」(写) 5 「節用集」易林本(刊)
- 6 「倭玉篇」(刊・慶長一八年)
- 7 「補軍記七之巻」(刊・元禄九年)
- 8 「曾我物語」(刊)

昭和五十六年度春季学会開催一覽

情報室

古代文学会 ① 一七三板橋区双葉町四一—九古橋信孝方② 予定なし

上代文学会 ① 一〇一千代田区神田神保町三一—二七共立女子大学文学部日本文学研究室内(但し四月以降成城大学)② 五月三—二

日本演劇学会① 一六〇新箱区
稲田一六 一 早稲田大学演劇博
物館内
日本歌謡学会 ① 一五〇渋谷区東
四一〇 一 二八国学院大学文学部
第五研究室内②

表観学会 ① 一四八〇—二愛知郡
長久手町大字長湫字片平愛知淑徳
大学文学部国文学科研究室内②五
月一六—一七③筑波大学
仏教文学会 ① 一一二文京区白山
五—一八—二〇東洋大学短期大

○九国文研究室内②予定なし

郵便番号、あて先、氏名を明記
のうえ、郵送料(切手)を同封して
当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館

東京都品川区豊町二六二〇
郵便番号一四二一
電話(七八五)七三二(代)
印刷所 株式会社 三興